

沖浦和光さんと私

後 藤 邦 夫

元氣そうだ。そのうち会えるだろう。いずれ電話しよう。と一日伸ばしにしていると突然の訃報である。驚いて電話機をとって奥様にお悔やみを申し上げ、大急ぎで狭山のお宅に伺った。眠っているような死に顔は安らかで、すぐにでも目を開いて話し始めるかのようにであった。しばらく奥様やお嬢様と言葉を交わして辞去したが、長い交友が突然打ち切られたことで混乱していた。

沖浦和光さんの名前を初めて聞いたのは一九四八年の秋である。その年の六月、国立学校の授業料が一挙に三倍に値上げされるといふことがあり、学生たちのゼネストがあった。それを機に同年秋に全学連が結成された。結成大会に出た寮の同室の友人が帰ってきて様子を説明してくれた。「委員長は演説はうまいが線が細いようだ。傍に座っていた沖浦というのがどっしりとしていて信頼できる」というのであった。翌四九年になると、本郷で開かれた会合で壇上の沖浦さんを見かける機会があったが、特に言葉を交わす関係ではなかった。当時の印象は学生活動家というよりも文学者の卵という感じだった（事実、雑誌『学生評論』には沖浦さんの小説が掲載されていた）。

それから十年余り、沖浦さんは東大文学部・大学院で中野好夫教授に師事し、新制中学の英語教員を務めながらアメリカ文学思想史研究に励み、私は名古屋大学物理学教室で過ごした。そして、桃山学院大学の教授会の席上で突然

沖浦さんと出会い、共通の知人の話題などで盛り上がりすぐ親しくなった（共通の知人のひとりが兩名の出会いの機会を作られた勝部元教授である）。それから半世紀、専攻する学問分野が全く異なり、性格も対照的であったにもかかわらず、相互の信頼と友情は揺らぐことはなかった。

顧みれば一九六〇年代の桃山学院は文字通り波乱万丈であった。自前の資金なしの大学設立（当時はそれが可能だった）の結果、財政危機は深く、設備増強は進まぬまま高校は校庭の一隅の仮設校舎まで生徒で溢れていた。大学は教授会運営に関する意見対立で有力教授たちが辞職し、関連大学から出講を予定されていた非常勤講師の辞退も相次いだ。完成年度に達していない新設大学にとっては真の危機である。教員組合の里井委員長、沖浦書記長は獅子奮迅であった。当時の八代斌助理事長、小島昌太郎学長、小寺廉吉学部長はじめ、多くの方々のご努力のもとで事態が収まり、新たな社会学部設置と登美丘学舎の建設の目途がたった頃、沖浦委員長のもとで組合書記長だった私が教務部長に就くことになった。沖浦さんの強い要請でもあった。当時三十五歳という若さだけが取り柄の私を支えてくださった方々には感謝の他はない。しかし、これでこの若い大学から離れることはできないだろうと覚悟した。沖浦さんも同じ思いだったようである。

やがて、一九六〇年代後半からアメリカ、フランスで起こった「学生の叛乱」が世界中に波及した。日本では東大医学部と日大における大学当局の不条理な対応が導火線となり、全国、さらに桃山学院大学にも及んだ。とくに一九六九年の六月から十月までは大衆団交、学舎封鎖と相次ぐ日々であった。当時の大学執行部は、機動隊導入など警察力による解決を行わないという方針を堅持した。教育者として当然の方針であったが、その維持には、とくに教職員の方々に強い緊張を強いるもので決して容易ではなかった。話し合いによる封鎖解除、授業再開ののちも緊張状態は続いた。私は一九六八年に常務理事を兼務したが、沖浦さんは常務理事補佐として一貫してサポートされた。

あまり思い出したいくない過去である。ただひとつの「良き思い出」を挙げるとすれば、このような状況下でもアカデミアに住まう人間としての誇りを失わなかったことである。沖浦さんと日常を共にする中で交わされる話題のほとんどは学問に関することであつた。一見大雑把に見える沖浦さんであつたが、文献・テキストの読みが細密であることに驚かされた。繊細な一面を見る思いであつた。一九六九年の秋も深い頃、珍しく夕刻に終わった教授会のあと、人気のない昭和町の教員控え室の一隅でテープレコーダーを回しながら、沖浦さん、坂本賢三君と私で座談会を開いた。テーマは当時話題になりかけていた「情報化社会」に関するものであつた。沖浦さんは以下の趣旨を述べた。予想されるメディア環境の激変が社会における人間関係の大変革を予想させる。いち早く変化の「影」を察知し反応したのは若い学生諸君である。我々は「影」の背後にある真実の展開を予測して提示すべきである、というのがあつた（プラトンの「洞窟の比喩」の見事な読み替えである）。議論は尽きなかつた。討論の目標は来るべきコンピュータ時代における人々の営みの変化の予測であつたが、同時に、厳しい日常とそなかで苦闘する自己そのものを大きな歴史的变化の流れの中におき、学問的に対象化することによって、現実を乗り越え自らを解放する作業となつた。互いの住居が近かつた坂本君との帰宅途中の話題は哲学、特に現象学であつた。同君の主著のひとつ『機械の現象学』に幾らかは役立つたと思いたい。

その座談会は、北沢万邦君の誌上参加を加えて雑誌に発表され、朝日新聞の論壇時評で河野健二先生（京大人文研―当時）が取り上げて評価された。

同じ頃、日本評論社から刊行されていた『講座マルクス主義』のための研究会や執筆活動も進行していた。とくに第2巻「科学とイデオロギー」は、水戸におられた編者の梅本克己先生と電話や手紙で連絡を取りながら、沖浦さん、玉井龍象さん、坂本賢三君、私、とすべて桃山の教員が執筆した。梅本さんのあとがきは「筆者を除く4人の執筆者

はいずれも大学闘争の渦中にあり、到底執筆できる状況にはなかったが、いずれも予想を上回る出来栄である」というのであった。

やがて、学舎の登美丘への全面移転、経営学部増設と進んだところで沖浦さんと私は教育と研究に専念する「普通の教員」に戻った。ちょうどオイルショックや環境問題が戦後日本のあり方を大きく問いかけた時期である。沖浦さんはヨーロッパで研修し、さらに日本や東アジアの古層の歴史・文化・民俗の研究を深めてゆく。私は、大阪市立大学長を退任された後しばらく桃山に在職された渡瀬譲先生のお勧めでエネルギー問題に取り組み始めていた。全く方向が異なるように見えたが、当時の話題であったローマクラブの『成長の限界』を巡って討論する機会があり、長洲一二、中岡哲郎、正村公宏の諸氏をも交えて実り多い議論を交わすことができた。

このまま定年まで無事に努めることができると思われたにもかかわらず、また転機がやってきた。きっかけは財政危機である。私に理事再任を強く要請したのは、自身も理事就任を決意された社会学部長小川登君である。一九八一年のことであった。小川君に促されて久しぶりに学院の財務諸表を眺め、純負債比率八百%という数字に驚かされた。土地建物を含む総資産の8/9が負債、ということであり、近いうちの債務超過・破産も予測された。

学部増や定員増で収入を増やそうとしても、文部省（当時）は、純負債比率が六十%まで改善されない限りいかなる申請も受け付けないという。「規制緩和」の昨今とは正反対の「原則抑制」の文部行政の時代である。学費改定を含む「痛みをともなう施策」は必然であった。なんとか四年間で目標を達成し、文学部増設や短大募集停止の申請に乗り出すことができた。この間、包容力があり学生たちとも親しかった沖浦学長の存在は貴重であった。積年の課題でありながら財政難で見送られてきた計算機センターも発足した。

一九八六年、いよいよ文学部（現国際教養学部）増設に向けての活動が始まる（国際教養学部の計画もあったが当

時の学院の財政力では無理であった)。学長は稲別さんに替わっていた。学長を退任したばかりの沖浦さんは、世間的には「格下」であるが申請にあたつては最も重要な「文学部長予定者」を引き受け、教員組織の編成に尽力された。沖浦さんの広い交友関係が役立ったのは言うまでもない。直接、電話で山崎春成さんを説得される現場に居合わせたこともある(山崎さんは後に学長となり大学の和泉移転を成し遂げ、学院財政を磐石のものとされた)。

私は、文学部発足の一九八九年に学院を離れ、再び大学の一研究者に戻る(その後も大学院の創設などのお手伝いはした。その時も沖浦さんは初代研究科長であった)。以来、沖浦さんも私もそれぞれの研究分野の教育・研究と社会的活動に集中して行くことになる。そこでも二人の方向は全く対照的であった。沖浦さんは人権問題と取り組み、その根源ともいべき東アジア・日本の基層文化に切り込み、日本各地や東南アジア・インドを対象とするフィールドワークで活躍された。私はといえば、関西文化学術研究都市構想など関西の様々なプロジェクトに参画し、在職中は控えめであった海外出張を定年とともに増やし、ケンブリッジのニードム研究所とテキサス大学オースティン校のICC研究所を足場に専ら欧米諸国を歩き、現代日本の科学技術の社会史と取り組んだ。それぞれがこれほどまでに異なった方向に走ったにもかかわらず、交わす話題が尽きることがなかったのは不思議というほかはない。

定年退職から十年あまり、たまたま沖浦さんのお宅に電話をする機会があった。奥様が出られ、腎不全の悪化で急遽入院し透析治療を始めたとのことでご本人と話す機会は得られなかった。その数年後、私自身が同様の運命をたどることになる。テキサス大学の定例のフェローズ・ミーティング出席のためにアメリカ行きを準備していた私は、ドクターストップを受け、透析生活に入ったのである。

私はあまり過去を振り返る人間ではない。しかし、桃山学院大学のキャンパスをたまに訪れるとき、「OG打倒!」と大書した立て看板を横目に登美丘学舎のピロティを抜けて研究室や事務室に向かった四十数年前を思い出す。人の

生は有限であり、靈魂の不滅が信じられる時代でもない。しかし、沖浦さんや私だけでなく、その他の多くの教職員の方々が、それぞれの人生の最も重要な時期を捧げた大学の、世代を超えた存続・発展は十分に期待できるだろう。亡き沖浦さんにとって、それに勝る鎮魂はないのである。

（桃山学院大学名誉教授）

略歴

一九二七年 一月一日 大阪府豊能郡箕面村半丁四一番地に生まれる

一九三三年 四月 箕面村牧落小学校入学。阿倍野区晴明丘小学校へ転校

さらに住吉区田辺小学校へ転校

一九三九年 四月 桃山中学校入学

一九四四年 四月 大阪府立浪速高等学校文科甲類（旧制）入学

一九四七年 四月 東京大学文学部文学科英文学専攻（旧制）入学

一九五三年 四月 東京大学文学部大学院英文科（旧制）入学。そのかわら東京都大森第八中学校で英語を教える

一九六一年 四月 桃山学院大学専任講師

一九六四年 四月 同助教授

一九六九年 四月 同教授

一九八二年 四月 桃山学院大学学長に就任（一九八六年三月まで）



桃山中学校『卒業アルバム』より
(第42期生、1944年3月卒)



桃山学院大学学長時代
(新入生歓迎会1985年4月8日)

一九八九年 四月 文学部の新設にともない、文学部長に就任（一九九一年三月まで）
 一九九三年 九月 大学院文学研究科科长（一九九五年三月まで）
 一九九七年 三月 桃山学院大学を定年退職。同年四月、桃山学院大学名誉教授の称号を受ける
 二〇一五年 七月八日 腎不全により逝去。享年八十八歳
 十一月三日 「偲ぶ会」がホテル大阪ベイタワーにて開催

